

第I章
世界文化遺産 姫路城公式ガイド



世界文化遺産登録エリア

中曲輪

世界遺産のエリアは、登録当時の特別史跡指定区域でもある約107haという広大な範囲である。三重の堀で囲まれる内・中・外の3つの曲輪のうち、内曲輪全体と中曲輪の大部分が含まれるが、南にやや張り出す中曲輪南東部は含まれていない。

江戸時代には、中曲輪の大半が武家地であった。重臣や役付の中・上級武士の屋敷が配され、時代により幅があるものの、300近くの間が設けられた。屋



姫路城の曲輪と特別史跡指定区域図



*バッファゾーン
世界遺産を保護するため、必要に応じて遺産の周囲に設定される利用制限区域のこと。この区域は、遺産と調和のとれた景観形成等が求められる。

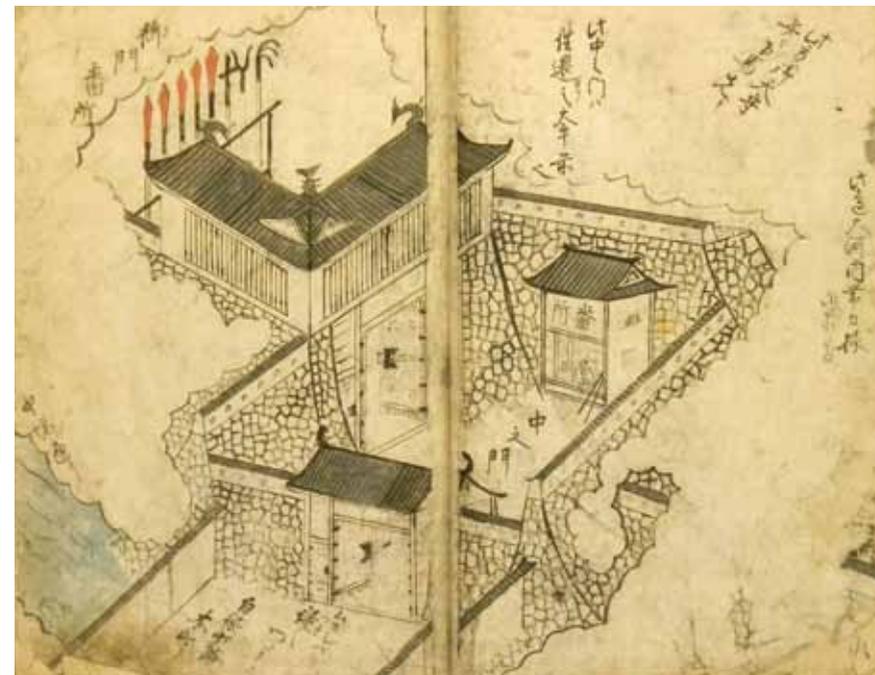


姫路侍屋敷図 1751～54(寛延4～宝暦4)年
姫路市立城郭研究室蔵

敷割は、それぞれの家格等によってなされ、特に1000石以上となる家老クラスは、桜門南側の大名町に、5000㎡を超える広大な屋敷を与えられた。武家屋敷以外では、藩主の屋敷である東・西屋敷、藩の公的施設である御用場、会所、馬場などが設けられ、酒井家時代には、藩校の好古堂も設置された。西屋敷跡は、発掘調査の成果による屋敷割りを取り入れた庭園「好古園」として整備されている。中曲輪南東部には、播磨国総社（射楯兵主神社）及びその社家があった。

中曲輪は、周囲に設けられた堀とその内側の土塁で防御されていた。堀は、外側を石垣、内側は城門付近を除いて土塁、堀底は素堀（土の崩れを防ぐ工事を行わない堀）を基本とし、幅は、狭いところで10m前後、多くは20m前後で、水深は全体的に2m前後、南部のみ大正から昭和初期に埋められて国道2号となった。土塁は、幅6m前後、高さ4m前後である。堀に沿って、清水門をはじめとする11の門が設けられた。総社前に設けられた鳥居先門を除いて、枳形（小さな広場）の石垣に内外の門を構え、外門を高麗門（本柱2本の上に切妻屋根を架け、控柱上にも小屋根の架かる門）、内門を櫓門（櫓をのせた門）としている。

(大谷)



中ノ門
「大工幾蔵姫路城図」姫路市立城内図書館蔵

内曲輪

内曲輪は、姫山（現在の標高約46m）を中心とし、西の鷲山（現在の標高約36m）と周囲の平地を取り込んだ姫路城の中核部である。

本丸は、姫山にあり、大天守を中心とした天守丸、その南に備前丸、北西に水曲輪、北に北腰曲輪等から構成される。本丸を取り囲むように二の丸を配し、三国堀付近の三国堀曲輪、その北の乾曲輪、天守丸の東の東曲輪、備前丸の南の上山里曲輪等からなる。西の丸は、池田氏が因幡・伯耆に転じた後、1617（元和3年）に入った本多氏が、嫡男忠刻とその妻千姫の居館建築のため、鷲山を再整備したものとされる。本丸、二の丸、西の丸の南には、三の丸があり、藩政の中核として政務等を行う御本城（御居城）、千姫の御殿とされる武蔵野御殿、藩主の居住の場等の私的な御殿で、数寄屋、築山、泉水などを配した向屋敷からなっている。三の丸の東には、御作事所出丸、東三の丸、本丸の北部には、二重の堀に挟まれた勢隠曲輪が置かれた。

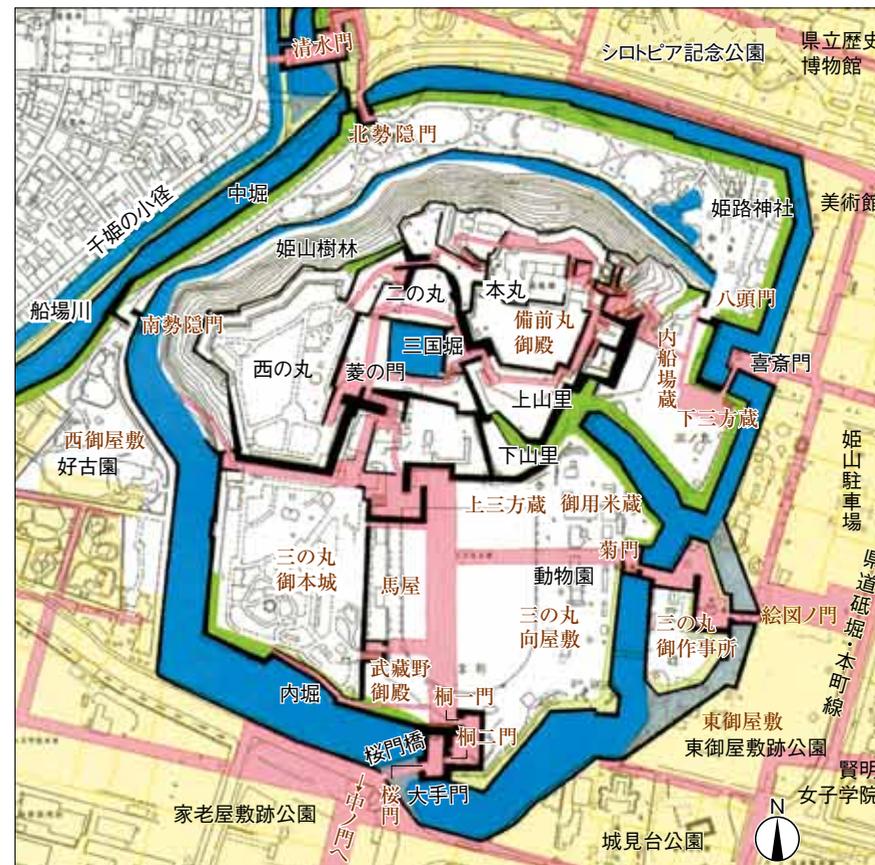
内曲輪の南端には、大手となる桜門・桐門を開き、北東には搦手（城の裏側）を固める喜斎門、作事所出丸の東面には絵図ノ門（絵図門）が置かれた。中曲



内曲輪の縄張

輪と内曲輪を分ける内堀は、本丸北東を起点として、左らせん状にめぐり、北西で中堀に接続する。堀は、天守丸北側では、外面のみ、それ以外では内外面を石垣とし、特に内面の石垣を高くして防備を高めている。堀底は素堀で、堀幅は桜門付近が比較的広く、最大幅50m近くになり、他の部分では10～20mで、水深は全体として2m前後である。

明治時代以降、現在の大手から三の丸にかけて、御殿や櫓、門などがことごと



内曲輪の御殿配置図
(本図は寛延4年～宝暦4年「姫路侍屋敷図」による)

凡例	
水	濠（現存）
水	濠（埋蔵）
土	塁（現存）
土	塁（消失）
道	路（江戸末期）
武家屋敷地帯	
石垣	（現存及び消失を含む）
寺・神社	

とく撤去され、軍施設等の整備が行われた。一方で、これらの失われた建物等を復興しようとする計画も進められ、1938（昭和13）年、新たに巨大な大手門が整備された。第2次世界大戦後、軍施設の撤去が進み、2006年には管理用通路として木橋風の橋を整備した。

本来の大手は、特に嚴重な構造である二重枳形門である。内堀にかかる太鼓橋の桜門橋を渡ると高麗門の桜門があり、その奥に二重目の枳形の桐門がある。外門は桐二門で西向き高麗門、内門は、桐一門で東に開口する櫓門である。現在の大手門は、ほぼ桐二門の位置にあたる。

桐門を入ると、現在の三の丸広場ほぼ中央に幅約21mの通路が大天守方向に向かっている。通路の南西には、武蔵野御殿、さらにその奥の三の丸高台にかけての広大な範囲に御本城（御居城）がある。総面積約4000㎡の御殿は、西の丸と同じく本多氏が拡張整備したとされる。通路に沿って三つの門が開き、南東部に玄関、「鶴の間」と呼ばれる上の間と下の間各50畳、入側51畳、計151畳の広間があった。これら政務を行う空間である「表」に加えて、私的な空間である「奥」があり、奥には風呂である湯殿、局と呼ばれる仕切りをした部屋等があった。

（大谷）



明治初期の姫路城。撮影時期は1874～82（明治7～15）年と推定される。
長崎大学附属図書館蔵・ボードインコレクション



三の丸の御本城（「播州姫路城図」中根忠之氏蔵より）



鶴の間（上の間）の復元CG
CG制作 福井工業大学 FUT 福井城郭研究所 多米淑人
障壁画作図 川面美術研究所

姫路城入城口内マップ



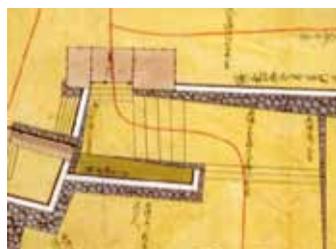
【見学ルートについて】
 本書では、
 入城口→菱の門→左へ曲がる→西の丸長屋群(化粧櫓)→ろの門から大天守へ
 というルートで案内しています。
 大天守見学後は、
 備前丸エリア、上山里エリア、搦手(城の東側)エリアの順で案内しています。
 時間に余裕のない場合は
 入城口→菱の門→左へ曲がらず直進→いの門から大天守へ
 また、2017年1月現在は通行できませんが、
 入城口→改札を入らずに右へ→下山里(上山里曲輪の下。羽柴時代の石垣を見学)
 →搦手(との四門)から大天守へ
 というルートもあります。

城内探訪

入口エリア

■菱の門

現在、入城口での改札があるものの、それを除けばほぼストレートに大手門から菱の門へアプローチが可能である。しかし江戸時代は、菱の門の前に新門とそれに連なる多門（多聞）櫓が林立していた。つまり、新門を外門、菱の門を内門とする大きな枳形空間が存在していた。さらに新門では折れが連続し、かつ虎口（城郭の出入口）が坂虎口となる厳重さ



菱の門の枳形（「播州姫路城図」中根忠之氏蔵より）



菱の門

で菱の門へはその枳形を通らねばならなかった。新門と多門櫓は全く残っていないが、入城口前のスロープが新門の坂虎口の名残なのである。

入城口を入ると、まず菱の門である。しかし、門の手前に石垣と土堀があって、菱の門全体を見通すことができない。これは菱の門に付随する蕪の石垣が手前にあるためである。いわば外門のない外枳形を形成して、通路は2回折れて菱の門へ到達するようになっている。

菱の門は、城内に現存する門では最大の櫓門で、2本の鏡柱（太い主柱）上部の冠木（水平材）に大きな木彫りの菱紋がついているのでその名がある。建物の外壁は柱や舟肘木、貫、長押などの形がわかるように漆喰を塗っていて、大天守最上階の外壁と同じ仕上げである。2階の正面には格子窓と火灯窓が設けられ、黒漆塗り



(上)三国堀 (下)V字状の石積み

の格子と窓枠に金色の飾金具を打ち、装飾的な造りになっている。背面にも同じ格子窓が付くが、火灯窓も装飾的な格子もない。建物のどこが目立つのかを考慮し、見栄えを意識して建てられている。伏見城から移築した城門という伝承があるが、解体修理ではその証拠になるものは発見されていない。

入母屋の屋根は、東側の妻は漆喰で塗込められているのに対し、西側は素木で木連格子とし、変化をつけている。

1階正面には大きな扉があり、その西側脇に潜戸が付く。この通路を挟んで東西に部屋が1つずつ配置されている。潜り戸を潜ったところに西

側の部屋があり、引違い格子戸があって番所の役目を果たしていた。一方、通路の東側の部屋は、西側に比べて広く、南側に武者窓（格子窓）が付く。「馬見所」とも言われるが、確かな根拠はない。一時期、作事小屋として使用されていた可能性がある。

■三国堀

菱の門を入ると目の前に三国堀が現れる。ほぼ正方形をした捨堀（外部につながっていない堀）で、「用水池」と記した江戸時代の史料もあるので、姫山と鷺山に挟まれた谷をせき止めてできたまさにダムであった。菱の門から侵入した敵を挟撃して追い落とすために掘られたわけではない。敵を堀に落とすためであれば、東南隅にある石段は不要なはずである。

三国堀の由来は不明だが、「山谷ホリ」と記す絵図も残っていて、堀の立地条件に由来する可能性もある。

三国堀の北側石垣をよく見ると、V字状の石積みがあるのがわかる。三国堀の北面と東面の石垣は昭和の大修理で積み直されたが、V字状の石積みはもとの通りに戻された。羽柴時代の堀割痕跡を示すものとみられる。当時はさらに北側に堀が伸びており、池田輝政はその堀を埋めて、新たに三国堀を造成したと考えられる。（工藤）



西の丸の全景



西の丸南門の武者溜り

西の丸を行く

■菱の門から西の丸へ

菱の門を入ってすぐ左に曲がる。菱の門の木連格子の入母屋屋根の妻を仰ぎ見つつ、坂道を登れば西の丸と呼ばれる曲輪である。

西の丸は池田氏転封のあと 1617(元和3)年に城主となった本多忠政が築いた曲輪で、嫡男忠刻の御殿が建てられた。忠刻の官職が中務大輔だっ

たことにちなみ、西の丸を中書丸とも呼んだ。中書とは、中務の古代中国風な名称である。

坂道の下にはかつて西の丸南門があつて、現在は礎石だけが残っている。門跡の左手には雁木(石階段)と武者溜りがある。雁木を登れば土塀の手前に細長い平場がある。この平場は菱の門2階への通路と、菱の門前を横から射撃するための武者走りの役割を兼ねている。

武者溜りは土塀に囲まれたほぼ正方形の空間で、菱の門前への射撃と外柵形の入口周辺を側面から射撃できる位置にあり、二の丸正面の防禦の役割がある。

西の丸の御殿は1626(寛永3)年に本多忠刻が病没してからは使用されることもなくなっていったよう

で、酒井時代には焼失した江戸上屋敷を再建するために、残っていた建物を解体して、江戸上屋敷の一部移築された。移築後、御殿跡には御旗蔵、御武具蔵、御鉄砲蔵、御弓箭鎗蔵が建てられ、明治になって城内に駐屯した陸軍はそれらの蔵を弾薬庫に転用した。

西の丸には御殿以外の建物は一部を除いてほぼすべてが現存している。西の丸南端には、東にカの櫓、西にワの櫓がある。いずれも二重櫓だが、カの櫓は姫路城には珍しい上下階が同じ大きさの「重箱櫓」である。部材には転用材が多く使われているのが特徴で、移築建物の可能性もある。

ワとカの櫓の間の土塀には、石落



窓の八角形の格子(この窓では、中央の格子の内側の面の鉄板が残存している)

しがついている。昭和の大修理以前、これらの石落しは無かったが、土塀を解体してみると石落しの痕跡があったので復元したものである。土塀の下の高石垣には、西の丸を造成するための盛土を、土留めする役割がある。盛土が不同沈下を起こすので高石垣も微妙に動くため、当然、その上部に築かれた土塀も安定せずゆがみが生じる。そのため、この土塀はたびたび補修をしなければならなかった。

■百間廊下

レの渡櫓から続く長屋群を「百間廊下」と呼ぶ。江戸時代の名称ではないが、西の丸を囲む石垣上に建てられ、曲輪の西から北を巡るその長大さを端的に表現する名称となっている。長屋内部は城外側が廊下(武者走り)で、窓の格子は城外側では断面が八角形になっている。そのうち四辺を鉄板で補強、切削できないようにし、全体を漆喰で塗込めている。さらに狭間と石落しも備えている。鉄砲隊を廊下に配置すれば、天候が風雨でも火縄銃による射撃が可能である。

男山と景福寺山は姫路城の西側に近接するため(72ページのマップ参照)、ここを敵軍に占拠されると城攻めの橋頭堡とされてしまうのは必至で、この弱点を補うには、長大な長

屋（多門櫓）を築いて防禦力を増強する必要があったのである。

「百間廊下」のほぼ中央部、ヲの櫓とレの渡櫓の間に新しい渡り廊下がある。この部分は1918（大正7）年にレの渡櫓に続く隅櫓が石垣もろとも崩壊した箇所である。その修理に



復元された羽目板



化粧櫓外観

あたり隅櫓に接する渡櫓も腐朽が激しかったため解体し、石垣だけを積み直し、土塀を新たに築いた。建物の復旧は諦めたため、渡り廊下となっている。

■松の描かれた羽目板

ヨの渡櫓からカの渡櫓にかけて、建物内にはいくつもの部屋が設けられた。廊下と部屋の境を壁で仕切り、部屋内部には納戸（物置）も設けられている。天井も張られており、人の居住が想定されたものだった。こうした部屋は局とも呼ばれ、西の丸御殿で働く女中らの部屋であったと考えられる。忠刻の没後は干飯などの食料備蓄倉庫となった。

昭和の大修理の際に、ヨの渡櫓で主室の塗壁の漆喰を剥がしたところ、中から松の彩色が薄く残る羽目板が見つかった。もともと壁は塗壁ではなく羽目板で、そこに彩色画が描かれていたのである。

現在、カの渡櫓では修理工事中に発見された彩色のある羽目板を復元した資料を展示している。

■化粧櫓

化粧櫓は西の丸の北隅に建つ二重櫓である。2階内部は書院造で「化粧間」とする記録もあり、西の丸御殿の一部として機能していた建物とみられる。しかし、カの渡櫓に続く



化粧櫓の内部



二段積みの石垣



岩盤の上に立てられたのがわかる

北側入口に接して床の間が位置するのは変則的で、当初の形態が残存しているかどうか、慎重な判断が必要になる。

化粧櫓の名称については、千姫が男山に建立した天神社を西の丸から遥拝するために、まず身だしなみを調える部屋に由来するとされる。も

し西の丸から遥拝するのならば、廊下から格子窓越しにしなくてはならず不自然である。「化粧」が人の所作や動作を意味するのであれば、その主語は、西の丸御殿の主人である忠刻とするのが素直であろう。

■池田時代にも何か建物が

「百間廊下」は石垣の上に載っている。この石垣は城内側から見ると、ヲの櫓あたりまでは二段積みになっている。

本多忠政の入封にともなって西の丸が整備されたが、それまでの状況はよくわかっていない。しかし、ルの櫓の下からは西の丸造成前の建物跡が出土しているので、池田時代にもすでに何らかの手が加えられ、岩盤上には建物が建てられていた。

御殿を建てるため、上段石垣の根元から掘削して地面を下げて、その下がったところに下段石垣が積み上げられている。その現在二段積みになっている石垣のうちヨの渡櫓中央部から北は、当初は上段だけが築かれていた可能性が高い。つまり、この部分は、江戸時代は上段が石垣で、下段は石を積まず、岩盤を露出させていたのである。昭和の大修理では、「百間廊下」の建物とその基礎の石垣も修理されることになり、このとき露出していた岩盤を隠すように石が積み上げられたのが下段石垣である。（工藤）

コラム

千姫(1597-1666)——姫路城で最良の日々が…

姫路城西の丸に、いわゆる千姫化粧櫓が建っている。千姫に与えられた空前の化粧料10万石の格で造営され、百間廊下と呼ばれる長局を伴って美しいカーブを描く。姫路入りした千姫は、この西の丸の一角に住んだ。

千姫は、1597(慶長2)年、伏見徳川屋敷で生まれた。父は2代将軍となる秀忠。母は織田信長の妹・お市の三女・江。7歳になった1603(慶長8)年、11歳の豊臣秀頼と祝言をあげ、大坂城に入った。12年後、祖父・家康が夫の秀頼を攻めた。「大坂夏の陣」である。千姫は、落城する城内で秀頼とともに自害しようとしたといわれるが救出された。

江戸への帰還中、伊勢・桑名で城主の本多忠政の嫡男、忠刻を見初めたという。真偽は別に、1616(元和2)年、その忠刻の正室となった。そして、忠政の姫路転封とともに、忠刻ともども、姫路入りするのである。21歳であった。

化粧櫓から望むお城は、格別の美しさがある。天守が発する白いオーラは、千姫の深く傷ついた心を癒した。間もなく、勝姫、幸千代姉弟を相次いで出産、本多家中は華やいだ雰囲気包まれた。千姫にとって姫路城は、秀頼との思い出も含め、つらく厳しい過去も忘れさせ、生涯最良で最も充実した暮らしの舞台となった。

しかし、幸せな日々は暗転する。1621(元和7)年幸千代が、5年後には夫・忠刻、続いて忠刻の母・熊姫、さらに千姫の母・江までもが次々と他界する。この間、千姫は、姫路城北西の男山に忠刻の病氣平癒を願って天満宮を建て、徳川の葵紋、豊臣の桐紋の入った6枚の羽子板を寄進、化粧櫓から日々、祈りをささげていたという。

忠刻亡き後の千姫は、1626(寛永3)年、江戸・竹橋の御殿に帰り、下総・弘経寺くわんけいじの了学上人により落髪、天樹院と号した。世に「妖婦」の異名もあるが、



「千姫姿絵」(茨城県常総市・弘経寺蔵)

実際は、実弟の3代将軍家光を助け、秀頼が側室との間にもうけた娘を鎌倉東慶寺に入れ、「駆け込み寺」の基礎固めもした。戦の不条理を飲み込んだうえで、まっすぐに生きた生涯であった。(中元)

二の丸を行く

■いの門から二の丸へ

いの門を入ると二の丸である。目の前はろの門で、姫山と鷲山の鞍部に位置する。ここからはの門うわみちへ向かうルートが「上道」で、次の曲輪いぬいくるわが乾曲輪である。乾曲輪は姫山の尾根上に築かれているため、鞍部から尾



通称「將軍坂」



いの門

根に取り付くには、斜面を登る坂道が不可欠である。それが「將軍坂」と呼ばれる坂道である。この場所で「暴れん坊将軍」(松平健主演)に代表される多くの時代劇の撮影が行われてきたことに由来する通称であり、現代の姫路城を象徴する場所でもある。

ただし、1865(慶応元)年の長州戦争では、幕府は姫路城を将軍の宿城に予定しており、万一の場合は天守二重目に退避させることになっていた。もし将軍が姫路城まで出陣し、そこで万一のことがあれば、将軍はこの坂道を登っていたかもしれない。

はの門は櫓門で、櫓は切妻屋根で正面に格子付きの武者窓が開く。窓は櫓の規模からすると大きく、背面



はの門



かつて多門櫓が載っていた石垣

には窓がない。装飾性を排した造りと、両脇の石垣には櫓が載らないのが特徴である。1階の通路は乾曲輪への急斜面を直登するような坂虎口となっている。そうした現状をみると穴門的機能も想定できる。しかし、通路が石段になったのは、昭和の大修理で改修された結果である。もともとはカーブしたスロープ状になっていたことを考慮すれば、にの門と同じく屈折した通路に櫓門を配置した虎口になる。

■はの門からにの門へ

はの門を入ると目の前が乾曲輪である。曲輪の北端に残るのが口の櫓である。櫓の東西に土塀が見えるが、これは一連の土塀で、口の櫓の外側（北側）を巡っているのだから、城外側からは1階部分が土塀に隠れて見えないことになる。つまり、まず土塀を造ってから、その少し内側に櫓が建てられている。こうした造りにした理由は不明である。

口の櫓とはの門の間の石垣の上には、かつて多門櫓が載っていた。石

垣の手前の地面をよくみると礎石が残っている。

はの門からにの門方向へ向かう。はの門から右手方向に土塀がカーブを描きつつ南に逸れていくが、その土塀も途中で切れている。もし敵がここまで攻め入ったとすると、土塀にそって兵は進む習性があるので、にの門から出撃した味方が背後をついて、敵を土塀の途切れたところから追い落とすのだという。

この話は姫路城の現況から付会されたものである。なぜなら、途切れた区間は1882（明治15）年まで土塀が存在していたからである。つまり、敵を追い落とすとしても、落ちないようにになっていたのである。

備前丸の台所と多門櫓は、1882年に陸軍の失火によって焼失した。そのとき、崩れ落ちた備前丸の建物が、直下にあった問題の土塀を直撃し、崩落させたのであった。それ以来、当該箇所土塀は復興されることなく、土塀が無いままの状態になっている。

■にの門

はの門の石段を登れば乾曲輪で、見上げるとにの門の櫓である。

にの門は門正面に対する防禦だけではなく、はの門に対しても高い位置から監視できる。

通路は櫓の下を潜るトンネルのよ

うになっている。攻め手にすれば、そこで通路が90°屈曲しているのだから先を見通すことができない。かつ、



にの門の櫓



にの門



十字の鬼瓦

通路部の天井が低くなっているのだから、抜身を肩にかけたまま突進するにも注意しなくてはならず、氣勢を削がれる。

2階は櫓部で、門正面に格子付きの武者窓がある。東からにの門へ到る通路は石垣と土塀に挟まれた細道になっているのだから、武者窓から攻撃を受けると後退するほか逃げ道はないが、背後には二の櫓が高い位置からこの通路を押さえているのだから、挟撃されてしまう。

この門は、櫓門と口の櫓とその続櫓が一体化した建物となっている。門の正面からみると、1階は門でその上に櫓が乗っている。櫓の棟の上部に口の櫓の続櫓の屋根の妻が飛び出し、千鳥破風となっている。

口の櫓の一重屋根を西側から見上げると、唐破風の棟に載る鬼瓦に十字紋様が刻まれている。これを十字架と見なして、キリシタンだった小寺（黒田）官兵衛に結びつけて解説することがある。そもそもこの十字紋様がキリシタンの十字架であると証明されてはいない。さらに、官兵衛がキリシタンとなったのは彼が姫路城を退去した後のことであるから、常識的に考えて、この鬼瓦を官兵衛に結びつけるのには無理がある。

仮にこの十字紋様がキリシタンの十字架で間違いないと証明できても、池田輝政時代には池田家重臣や奥向

コラム

狭間と石落とし

狭間は、土塀や櫓等の壁にあけられた小さな穴を指し、敵が城内に侵入したときにはこの穴から弓矢・火縄銃で応戦する。長方形のものは矢を射るのに適した形状をしていることから矢狭間と呼び、それ以外のは鉄砲狭間（銃眼）と呼ぶ。断面形状は外側に近づくにつれ開口部を絞り込んだ漏斗状となっており、内側からの視認範囲を広く確保しながらも外側からは開口部が小さく内側が見えにくいという、的が小さい狙いにくい構造となっている。土塀にあけられた狭間の大半は扉が無く開放されたものであるが、天守群を直接囲う土塀には外面に漆喰を塗った板製の扉が付き、櫓や門と同様により堅固な守りとなっている。

狭間から覗いた外部の視認範囲は土塀の場合は非常に広い。これは築造工程によるところが大きいと考えられる。土塀は芯となる土を積み上げた後に穴を削り抜いて狭間を造る順序としているため死角の有無を確認しながら造っていくことが可能である。これに対し建物の場合は視野がごく限られる。これは内部の設えなど構造的な制約があるためであるが、窓や石落としと併せて全体として広範な視認範囲が確保される。ちなみに窓には土戸と呼ばれる建具が建て込まれている。6cm程度の分厚い板の外部に漆喰を塗り込んだもので、防火・防弾の機能を持つ。

外観形状は丸・三角・四角がある。土塀にはこの3種類の形状がみられるが、建物は扉を付ける必要があるため四角のみとしたのではないかと考えられる。天守群の建物に付く狭間は現在、外側は漆喰で塗り込められているが、壁面に見られる四角の5cmほど窪んだ箇所が狭間である。また大天守の内側は板が嵌め込まれたところである。

石落としは、石垣直上の土塀や櫓等に設けられた攻撃設備で、柱間2m程度の壁を外側に斜めに突出して造られ、直下の石垣が覗けるように下向きに開口部をあける（袴腰型）。狭間や窓では直下を見渡すには限度があるため、視認範囲を下方向にも拡大するものと考えられる。袴腰型は建物の隅や石垣の折れる箇所によく見られる。開口部の短辺は15cm弱と狭く、名のとおり石を落とすのであれば小ぶりなものしか落とせない。土塀のものは扉がなく開放であるが、大天守のものは10cmほどもある分厚い木製で、外部に鉄板を打ち付けた頑丈な造りとなっている。袴腰型以外のものは見つけにくい。菱の門、ぬの門の門扉の直上に、大天守では1階東面の出窓、2階南面の出窓に見ることができる。2階南面の出窓の石落としは一重屋根で塞がれているように見えるが屋根は無く、石垣が見渡せる。

（小林）

コラム

石垣

姫路城は平山城であり、曲輪は3から4段の石垣で形成される。そのうち、天守東側の帯の櫓石垣が高さ約23.32mと城内で最も高い。その他、天守台石垣が高さ約14.8m。西の丸南側で約14m。「扇の勾配」と呼ばれる備前丸西側では約18mと、高さ5から20mの石垣を中心に構成される。

石材の加工度や積み方と、築城や改修の歴史的経緯から、5期に分類されている（山本博利「姫路城石垣研究の前提的作業Ⅰ」）。

1580（天正8）年からの羽柴秀吉による築城に伴うとされるのがⅠ期。加工していない自然石を主に用いた野面積みで、石材は凝灰岩のほかチャートや流紋岩などがある。上山里曲輪下段やぬの門付近、本丸北側の姫山樹林側などに残る。高さ5m程度までが多く、石の大きさもⅡ期以降の打込みハギのものよりやや小ぶりである。ただ、菱の門東方など主要通路に面したところでは、鏡石として大形石材の使用も認められる。

天守台やぬの門外側の備前丸西側石垣などがⅡ期。関ヶ原合戦の戦功で姫路城主となった池田輝政が1601～09（慶長6～14）年にかけて築いたものと考えられる。粗割りした凝灰岩を主に積上げた打込みハギ。石を割るのに用いた矢穴の痕跡が多く確認できる。高さ20m以上の高石垣が出現し、勾配が急になるとともに、「反」と呼ばれるカーブが見られるようになる。

1617（元和3）年、池田氏に替わって城主となった本多忠政による西の丸築造などに伴うのがⅢ期。凝灰岩による打込みハギで、特徴はⅡ期の石垣と共通点が多い。ただ、天守台などⅡ期の主要石垣には横目地が通らない「乱積み」や「落し積み」が多くみられるのに対し、西の丸南面では横目地が比較的通る「布積み」の傾向が強い。

その後、大規模な改築はなくなるが、修理は継続して行われており、江戸時代のものをⅣ期、明治以降のものをⅤ期とする。（多田）



Ⅰ期石垣〔上山里下段〕



Ⅱ期石垣〔天守台〕



Ⅲ期石垣〔西の丸南側〕



Ⅴ期石垣〔帯の櫓東側〕

には多くのキリシタンがいたことがわかっている。官兵衛ではなく輝政に関連づけるのが合理的である。

■迷路のような通路

いの門からにの門にかかる上道のルートは通路が屈曲しており、とくに、にの門前では進行方向を180°も変えるので、迷路のような感覚になる。

これは通路を迷路状にして敵の攻撃力を削ぐものだとし、姫路城の防禦力を高く評価することがあるが、本当にそうした意図で設計されたかどうかはわからない。この迷路に関連づけて解説される途切れた土塀もあとづけの話であることを考えると、通路が迷路状になった意味について見直す必要がある。

乾曲輪が姫山から鷲山へ東西に伸びる尾根上に展開しており、そこへ谷底から取り付くためには急斜面を一直線に登るか、あるいは七曲り状に少しずつ斜面を登っていくかどちらかになる。姫路城では山の斜面に曲輪を雛壇状に配置した構造上、必然的に七曲り状の通路が設定されたのである。

■城内の貯水池

いの門を入ると、姫山の西尾根上に築かれた曲輪である。

本来は曲輪の西側石垣上に多門櫓が巡り、口の櫓とハの櫓という二重

櫓が建っていた。

現在、当時の建物は1棟も残っておらず、近代の建物が2棟建っている。ポンプ室と貯水槽であり、いずれも現在は城内防火用配水施設である。

明治時代になると、城内には陸軍が駐屯することになった。富国強兵のもと兵員や装備も増強されるようになったが、兵士の衛生状態は決してよいものではなかった。とくに上水道施設は貧相なものだったので、陸軍は姫路市に上水道の整備をたびたび要望した。しかし、水源地の確保、貯水池建設、水道管敷設などに膨大な経費がかかるので市は二の足を踏んだ。対外戦争を経験した陸軍としては兵士の健康は最優先すべきことであり、悠長なことを言っている暇はなかった。そこで陸軍は1916(大正5)年、清水門跡にある「鷲の清水」が水質、水量ともに水源に適していることを突き止め、その水を第十師団の各隊へ配水することに決定した。ポンプ室と貯水槽はこの時の名残で(建物は改築)、「軍都姫路」を象徴する近代遺産である。

姫山に揚水し貯水された水は、城内の歩兵三十九連隊と城北に増設された特科隊にも配水されたのであった。

■北腰曲輪

北腰曲輪は、天守台石垣の北側に

天守曲輪を囲むように広がる帯状の平坦地である。曲輪の北側は姫山の急斜面になっている。そこに石垣を築き、渡櫓(多門櫓)が載っている。

ハとニの渡櫓は備蓄用の塩を収蔵していた塩蔵であった。内部は土間になっている。補修したはずの壁の裾部が崩れているのは、土間に染込んでいる苦汁成分のせいだとも言う。江戸時代初期には3斗入で1300俵が



ハの渡櫓



口の渡櫓内部の井戸



油壁

備蓄されていた記録がある。ほかに小天守の地階にも塩が備蓄されていたことがあった。

ハとニの渡櫓の軒先はきれいな弧を描き、塗込めた垂木形が波のような造形になって見える。これは渡櫓の載っている石垣の形状を反映している。石垣が姫山の地形に沿って築かれたため、石垣の平面も城外側で弧を描く形状になっている。

口の渡櫓は室内に井戸がある。深さは約12mで岩盤まで到達している。大天守内には井戸が無いいため、水が必要な場合は、この井戸と備前丸の井戸から搬入することになる。搬入経路やその高低差を考えると、この井戸から運び込むのが便利ではある。

ホの櫓は二重櫓であるが、1階には丸太が、への櫓には瓦が収蔵されていたというから、天守まわりで建物の補修時に必要な資材置き場であったとみられる。

■油壁

ほの門を潜り、北腰曲輪に出ると右手に版築の土塀が建っている。土を練る際に油を入れたため油壁(あぶらかべ)と言うとされるが、構造的には版築である。版築とは型枠を組み、その中で砂や砂利を混ぜた粘土を何度も突き固めて作るもので、油は使わない。表面はバウムクーヘンのように互層になり、突き固まった土はコンクリー

トのように固くなるので、土塁や築地塀に用いられる工法である。姫路城では版築土塀はここだけで、ほかの塀は土の塊を重ねて築いた土塀ばかりである。

版築は古代以来の技術であること、白漆喰が塗られていないことから、これを羽柴秀吉時代の遺構と想定する説もある。しかし、江戸時代には油壁もほかの土塀同様、白漆喰塗りであったことが判明しているので、これが羽柴時代の遺構とするには検証が必要である。



ほの門



水の一門（左）、奥に水の二門

■ほの門

北腰曲輪を含め、天守曲輪へのアプローチは3カ所しかない。この門は、西側からの唯一の出入口にあたる。

門の形式は埋門^{うづみ}である。石垣を切り通して通路としているので、その通路に壁面の石垣を落とし込めば、この門から内部に侵入することは不可能となる。あるいは、通路のすぐ上には油壁が建っているので、もしこの壁を容易に崩すことが可能であれば、門を埋めることができる。

規模としては小さいが、非常時には厳重な守備が期待できる門である。

■水の門

ほの門から入ると右手に油壁があるため、その背後に天守入口へ続く通路が存在していることに気づきにくい。

油壁に接続して水の一門、二の櫓に接続する水の二門、そして水の三門と続く。水の一、二門は棟門^{むね}で、三門は埋門である。

このエリアを水曲輪^{みづくるわ}と通称する。天守台石垣の西側に配置された細長い帯状の曲輪のことで、上道を登って来た城主は、ここを通り天守に入ることになる。

「水」の意味については、口の渡櫓の井戸から天守に水を運ぶ経路であるからとか、火災除けの呪術的な意味で名付けられたとか、あるいは目

立たない配置なので、「見えない＝見ず」が「水」になったとか、諸説あるがはっきりしていない。



水の三門



水の四門



水の五門

■昭和の石垣

二の櫓から水の三門の間に土塀が続いている。水曲輪の内側では土塀の下には低い石垣が積み、水の三門の西側には宝篋印塔^{ほうきょういんとう}の基礎が転用石として積まれている。

転用石は羽柴時代から池田時代にかけて城内の石垣にはよく見られるので、この低い石垣もその時代に築かれたものと見なされ勝ちである。しかし、江戸時代には、ここは石垣ではなく土塁^{どろい}だった。現在の石垣が築かれたのは昭和の大修理のときで、昭和30年代の新しい石垣ということになる。

となると、宝篋印塔の基礎はいったいどこから転用したものなのだろうか。現代のできごとでも、分からないことは多いのである。（工藤）



水の三門横の転用石（宝篋印塔）



修理前の二の櫓南方土塀の土塁

コラム

転用石

鳥取城御三階櫓の石垣には「おさご手水鉢」と呼ばれる石造品がはめ込まれ、築城の困難を示す伝説を今に伝える。姫路城でも乾小天守石垣の北面には石臼の破片があり「姥が石」と呼ばれる。これについては秀吉による築城の時、不足した石垣石材の足しにと城下の老婆が献上したとする話が広まっている。

このように、別の目的で作られた石造品を積石に使用したのが転用石である。姫路城以外では、大和郡山城の天守台にある「さかさ地蔵」が有名である。姫路城では90点余りの転用石が発見されている（増田重信『姫路城の刻印と転用材について』）。姫山樹林に面した北腰曲輪や、は～にの門までのI期石垣を中心に分布し、備前丸の南側ではII期の石垣にもみられる。

主な石造品は、宝篋印塔や五輪塔、層塔、燈籠など仏教関係の石塔類と古墳時代の石棺で、その他に手水鉢などもある。

下山里曲輪の北西には、1951（昭和26）年に解体修理で取り出されたチの櫓下石垣の隅角部に用いられていた宝篋印塔の基礎などが集められている。



修理で取り出される前のチの櫓石垣の転用石

また、リの一渡櫓に置かれた石棺は備前丸東側の石垣中であつたもので、元の位置には替わりの切石がはめ込まれている。

転用石使用の背景は、石材の不足が考えられる。そのため、石材供給が安定した西の丸のIII期石垣ではほとんど確認できない。

ただ、五輪塔などの墓石や石仏の使用については、織田信長が築いた旧二条城や安土城の事例や宣教師の記録などから、仏教勢力への圧力を読み取る意見もある。その一方で、石塔を裏返すのは、けがれを逆転して城をまもるまじないとする説が出されている。

最近も姫路城では姫山樹林側の石垣で、石仏の転用が見つかった。「姥が石」の伝説についても、昭和30年代に位置が移動していることや、伝説が近代に生まれた可能性が指摘されている。こうした、新たな成果により石垣研究の進展が期待されている。（多田）



主な転用材の位置

大天守を行く

■地階一半分以上石垣で覆われた空間

全面に鉄板が張られた水の五門をくぐるとようやく天守曲輪の内部へ入る。水の六門を潜り通路なりに180°旋回すると、大天守地下入口が見える。

外側に観音開きの漆喰塗土戸、内側に鉄板張りの片開き扉で、二重に防御されている。8段の石階段を上り



地階



地階廁



地階流し

大天守内部へと入る。

地階は北・西面に窓が付くものの、東・南面の全面と西側の一部が天守台の石垣で囲われた閉鎖的な空間である。東西11間半余(21.8m)*、南北8間半余(16.9m)、面積約375㎡。西・北側に入側を設け、3間四方の6室に区分されている。北東隅と南西隅(上階への階段脇)の2カ所に厠を配置し、北西に簀の子の流しが備え付けられている。流し脇には台所へ通じる扉が付く。中央部に東西2本の大柱が建つ。柱の太さは東が約93×80cm、西は約99×75cm。

■1・2階一少しゆがんだ矩形

東西13間余(約25.8m)、南北10間余(約20.0m)、1階面積約550㎡、2階面積538㎡。

地階から2階までの平面は矩形ではなく、東面で少し歪みを持つ。東面石垣が南に向かって内側に狭まっている(約68cm)ため、南東隅が鈍角、北東隅が鋭角となる。2階までは望楼型の主屋に当たり、歪みを修正することなく石垣なりに建てられ、望楼部が始まる3階で修正されている。

平面形は1・2階ともほぼ同じで、四周に廊下を廻し、入側柱より内の身舎は大柱より南が大広間1室、北が3室に区切られている。1階は北3室ともが武具庫を兼ねた物置であるが、2階は西の1室に階段が付いた点



1階入口



1階全景



2階武具掛け



3階武者隠し

と、地階入口上部が1階西側に広い廊下となっている点が大きく異なる。

1階は西側に二の渡櫓に通じる扉と北側に一の渡櫓に通じる扉が付く。北側の扉は地階入口と同様の二重扉。西側は補強金具を施した潜り戸付きの片開き扉である。大天守には地階に2カ所、1階に2カ所、計4カ所の出入口が設けられているが、いずれも内側からしか施錠できない造りとなっている。

石落しは1階の北西隅を除く三方隅と東側出格子に、2階は南側出格子に設けられている。北の廊下の板壁には武具掛け、内法長押上には竹釘や鉤釘を打った火縄掛けなどが設けられている。

■3階一西大柱の継ぎ目

東西11間(約21.8m)、南北6間(約15.8m)、面積412㎡。3階は主屋小屋裏に当たる部分で階高が非常に高いのが特徴である。東・南・西面に入側廊下を設け、北面は下段を倉庫、上段を石打ち棚とする。南面にも石



3階全景

38 *寸法表記について：p.38～46では、間(m)というふうに寸法を表記しています。1間は6尺5寸3分が基準寸法ですが、天守内の場所によってはそうでない場合があります。そのため、カッコ内の数値が、間を単純にメートルに換算したのとは異なるものになっている場合があります。東西、南北の間数は、天守南面、東面の寸法です。

打ち棚が付く。四隅には「武者隠し」と呼ばれる上下2段の小部屋がある。下段は内向き、上段は外向きに銃眼



4階



4階北面



5階化粧番付



5階

が開けられているが、内向きの銃眼は珍しい。身舎中央には2本の大柱が建つが、西大柱はここで上下2本が継がれている。

■ 4階—千鳥破風の内側

東西9間(約17.8m)、南北6間(約11.8m)、面積209㎡。間仕切りのない一室で南・北面にそれぞれ2カ所の「破風の間」が付く。ここは千鳥破風の内側に当たり、正面に小窓を開け、両脇の壁に武具掛けを設える。4階には四周に石打ち棚が設けられている。石打ち棚の下は小屋裏を生かした「内室」と呼ばれる倉庫になっている。石打ち棚は火縄銃などで応戦することを想定しており、窓上には煙り抜きを考慮した高窓が付く。ここから階段勾配は一段と狭く急になる。

■ 5階—慶長期の匠が残した化粧番付

東西9間(約17.8m)、南北6間(11.8m)、面積209㎡。4階と同じ大きさであるが、四隅には小屋裏を生かした倉庫が付く。南・北面中央部に千鳥破風が取付くため、4階と同様に武具掛けが設けてある。また、東・西面は唐破風で壁が一段と高くなるため、ここにも窓を開け両脇に武具掛けを設えている。5階の外部は四重の屋根となっているところで、部屋があることは認識できない階となる。

このため四方に小窓を開けているが、非常に暗い。中央に建つ大柱はここまでで地階からの長さ24.6mに及び、径も細くなる。東大柱頂部は約52.8×39.3cm、西大柱は約57.2×46.7cm。南北の千鳥破風の棟木下面に「六中め南(北)ちどりむね」(六重目南(北)



6階



6階窓痕跡



高窓

千鳥棟)と彫刻されている。これは化粧番付けしょうばんづけと呼ばれ、慶長期の流行りでもある。

■ 6階—書院風の造り

東西7間(約12.8m)、南北5間(約9.0m)、面積115㎡。大天守最上階。四方に廊下を廻し、入側柱を立てて5間×3間の1室とする平面構成。書院風の造りとし、下階とは趣の違う空間としている。側柱は5階からの通し柱であるがこの階で細くしている。身舎は棹縁天井さおぶちを張り、壁には内法長押ありかべに加え蟻壁長押を廻し、その上に蟻壁を付ける。床も入側廊下より1段上げ格式の高い造りとしている。柱・長押は桧材、身舎の建具は引違いの両面舞良戸まいらどで、内側には障子を立てていた。長押に取り付ける釘隠しも銅製の六葉に金箔を施したもので、5階以下の木製漆塗りとは区別している。銃眼だけは最上階にも設けられ、その上部には高窓(いつ頃かは不明であるが漆喰が塗られて横長の四角い窪みの箇所)が開けられていた。

2009～2015年(平成21～27年)にかけて行われた修理によって、最上階全面を窓にする計画であったことが判明した。四隅の板壁となっている部分には敷居・鴨居が取り付けられており、内側の溝を利用して板壁が嵌め込まれている。(小林)

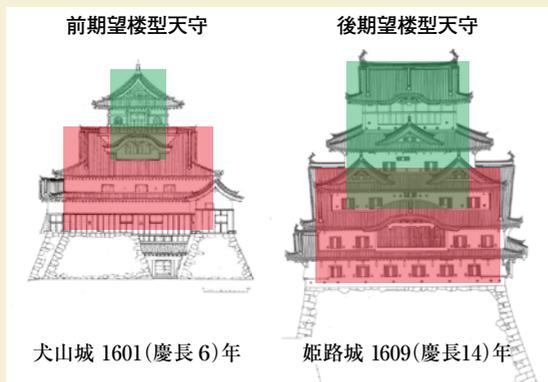
コラム 後期望楼型

天守の構造形式として大きく望楼型と層塔型に分けられる。更に望楼型は前期望楼型、後期望楼型に区分される。国宝五城では、1601（慶長6）年に完成した犬山城天守は前期望楼型となり、1606（慶長11）年の彦根城、1609（慶長14）年の姫路城大天守、1611（慶長16）年に完成した松江城は後期望楼型に区分される。その後元和初め頃（1615年頃）に完成した松本城天守では層塔型となる。およそ1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いまでの前期望楼型、これ以降の後期望楼型に区分される。更にその後1615（慶長20）年の大坂夏の陣までは望楼型から層塔型へ移行する。

望楼型の構造的特徴は、下層の入母屋造りの大きな建物（主屋）の上に物見塔（望楼）を乗せた構造である。これに対し層塔型は上下階を通し柱で繋ぎ、各層に構造的な関連性を持たせていることが挙げられる。

外観上の特徴は、前期望楼型は犬山城の例では、下層の主屋の大きさに比べて望楼部が小さいことで、後期望楼型では彦根城・松江城の例では望楼部が大きくなり、前期のような大小の差は軽減される。更に姫路城では上層に向かってほぼ一定の遞減率で各層のボリュームが小さくなるため、主屋と望楼部の判別が不明瞭となる。層塔型の松本城では主屋の入母屋破風は無くなり、初層から上層に向かって徐々にボリュームを小さく遞減させた形となる。

（小林）



望楼型天守の外観特徴

城	完成年	天守の構造形式
犬山城	1601	前期望楼型
彦根城	1606	後期望楼型
姫路城	1609	〃
松江城	1611	〃
松本城	1615頃	層塔型

城	完成年	天守の構造形式
丸岡城	1576	前期望楼型
丸亀城	1643～60	層塔型
宇和島城	1664～60	層塔型
備中松山城	1681～83	後期望楼型
松山城	1804～59	層塔型
弘前城	1810	層塔型
高知城	1749	前期望楼型

*年号はいずれも文化庁国宝重要文化財データベースによる

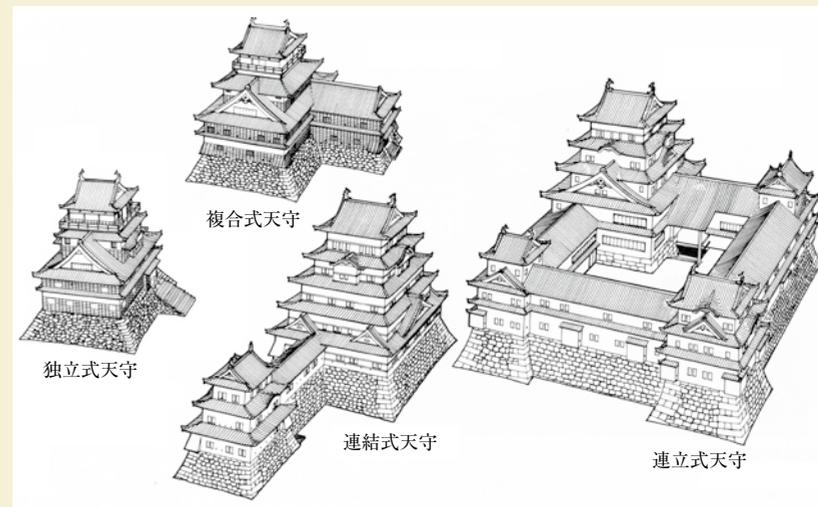
コラム 連立式天守

姫路城は連立式天守の代表格としてとりあげられることが多々あるが、連立式天守とはいかなる形態をとるのか。城郭が築かれ始めた初期の天守は独立した石垣のうえに建てられるのが一般的でこれを独立式天守といい、天守に付属する櫓などがつくものを複合式天守と呼ぶ。更に時代が下ると大天守と並立して小天守を建て、両天守を渡櫓でつないだものが連結式天守。大天守に対して3基の小天守または隅櫓を並立して建て、これらを「口」の字型に中庭を囲むように渡櫓でつないだものが連立式天守である。



連立式天守

天守の形式	現存12城
独立式天守	丸岡城、高知城、宇和島城、弘前城、備中松山城、丸亀城
複合式天守	犬山城、彦根城、松江城
連結式天守	松本城
連立式天守	姫路城、松山城



天守の種類(兵庫県立歴史博物館常設展示の解説シートより)

小天守と渡櫓

■西小天守一・二の渡櫓

西小天守は天守曲輪の南西に位置し、建築当初は「ひつじさる（未申）やぐら」と呼ばれていた（『姫路城保存修理工事報告書Ⅲ』によると、墨書が確認されている）。望楼型で外



二の渡櫓の石落とし



二の渡櫓天守への入口



西小天守

観は三重であるが、内部は地下1階、地上4階となっている。地下階には水の六門が付く。三重望楼部は南面に金箔を施した鍔金具を付けた漆塗りの火灯窓を開け、内部は棹縁天井が張られ、居室の設えが施されている。3階、地下階西面窓に素地の木製縦格子があるが、天守曲輪で唯一取外しが可能である。主となる入口は、北へ繋がるハの渡櫓1階にあり、二の渡櫓に通じる入口もこの階に設けられている。

二の渡櫓の下部は水の五門で、上部は二重2階建て、1階は水の五門扉外側に石落としが設けられ、2階は西小天守、大天守へ繋がる。



西小天守最上階



西小天守窓格子(3本のうち2本を取り外して撮影)

■乾小天守一ハの渡櫓

乾小天守は天守曲輪の北西に位置し、建築当初は「いぬい（戌亥）やぐら」と呼ばれていた。望楼型で外観は三



乾小天守



乾小天守最上階



乾小天守方杖



ハの渡櫓地階

重であるが、内部は地下1階、地上4階となっている。三重望楼部は南・西面に西小天守と同じ仕様の火灯窓が付く。内部は棹縁天井が張られている。3棟の小天守の中で、乾小天守だけ三重屋根を支える方杖がない。

ハの渡櫓は西 - 乾小天守を繋ぐ渡櫓で、地下1階、地上2階。天守曲輪の建造物内へ入ることのできる唯一の入口が地下にあり、中2階を介して地上1階へと上がる。この中2階下には厠が造られている。乾小天守1階には2階へと通じる階段はなく、ハの渡櫓2階から入る。

■東小天守一イ・口の渡櫓

東小天守は天守曲輪の北東に位置し、建築当初は「うしとら（丑寅）やぐら」と呼ばれていた。層塔型で外観は三重であるが、内部は地下1階、地上3階となっている。最上階内部は棹縁天井が張られているが西・乾小天守のような火灯窓ではなく、漆喰を塗った格子窓である。ここも1階から2階への階段は無く、イの渡



イの渡櫓2階



口の渡槽石落し



口の渡槽唐破風



天守曲輪



天守曲輪隔石落し

槽2階から入る。

イ・ロの渡槽は地下1階、地上2階。地階はかつて塩蔵として使用されており、現在でも石垣側の土壁は塩分を含む。口の渡槽は1・2階とも東西14間半(約28.8m)、南北3間(約5.9m)、面積約170㎡で、現存する渡槽で最大級の規模を持つ。1階北面には唐破風付きの出格子があり石落しを備える。

天守曲輪(大天守除く)に共通した仕様は、石垣内に地階を設け、渡槽は地上2階とする。1階外側窓は鉄格子、2階は漆喰塗り格子で、漆喰塗りの土戸を立てる。内側は素地の木製格子に板戸が立つ。小天守1階隅に袴腰型石落しを備える。(小林)



東小天守2階



天守曲輪鉄格子

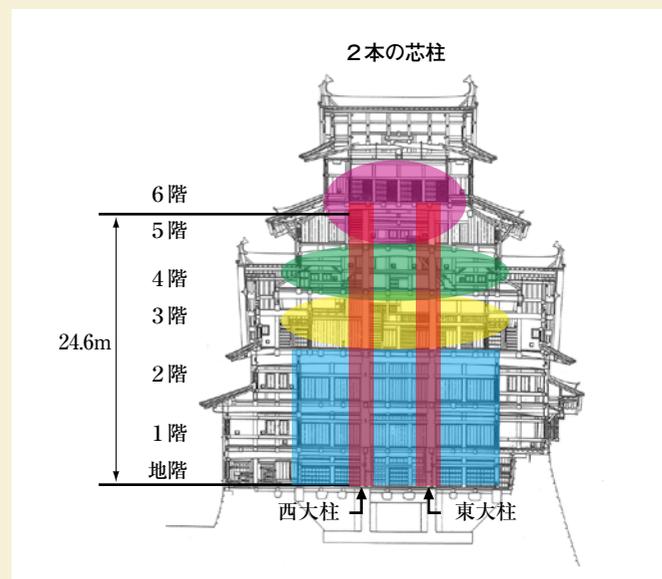
東小天守最上階

コラム 大天守柱構法

姫路城大天守は地階から5階までを貫通した東西2本の大柱をもつ。

大天守は地下1階、地上6階建てで、基礎から棟までの高さは約35mの高層建築物である。長さ24.6mに及ぶ2本の大柱は大天守の中心部に配置され、東大柱は1材の超長尺材。西大柱は3階部分で2材を継いで1本としている。2本の大柱は各階天井部の横架材で繋がれ、梯子状になっている。

大天守は大きく地階～2階、3階、4階、5階～6階の4つのブロックに分けることができ、地階から2階の大きなブロック(主屋部分)は、地階から2階の入側柱(地階から1階および1階から2階と、上下階にわたる通し柱)を用いたうえ、各階の横架材は均等に配置した整形の軸組みで、東西2本の大柱の足元を固めている。3階以上の望楼部分は、3階・4階は通し柱を用いず下階の柱位置とずらし、横架材に柱盤(土台)を置き、これに柱を建てる。5階は外部からは認識できない階で、6階までの通し柱を用いて1つのブロックとする。3階から上階の各ブロックも東西大柱に横架材を絡ませてあり、4つのブロックが大柱で串刺しされた体を成す。(小林)



大天守断面図

備前丸を行く

■井戸曲輪

備前門の前の傾斜路を南に下がる
と、左手に縁側のついた平櫓がある。



帯の櫓



井戸曲輪



折廻櫓

これが帯の櫓で、姫路城内では最も高い石垣の上に建つ櫓である。もともとは南側の長屋1棟だけだったものを、ある時期に北側と東側にも逆L字形に櫓を増設したので、平面はコの字形になっている。

南側の長屋は数寄屋風の建物で全3室あり、西室に簀の子天井があって茶室として利用されることがあったとみられる。

その長屋の下には石垣の中を潜る穴門があり、帯の櫓の南下にある井戸曲輪に通じている。曲輪の名称は、中央部にある井戸に由来する。一般に「腹切丸」と呼んでいるが、俗称である。井戸の南側にある帯郭櫓の1階の武者棚を検視の役人の席に見立て、その前で罪人が切腹したという話が付会されたものである。そもそも城内で罪人に腹を切らせるようなことはしない。

大事なものは、十数mの高石垣の上に曲輪が造成されている点である。つまり、石垣技術の進歩で石垣構築の自由度が増し、高さや地形に規制されずに曲輪を配置できるようになったのである。

井戸曲輪が搦手口を押さえる位置に意図的に設けられて、さらに帯郭櫓からは、井戸曲輪南側の下山里の東側と内堀から侵入する敵に対する射撃が可能である。姫山東方の防禦の要となる曲輪である。

■備前丸

曲輪名称は、池田輝政の二男忠継^{ただつぐ}が備前国を拝領したことに由来するという説もある。池田時代の御殿は、この曲輪にあったと考えられるが、詳細はよくわかっていない。

昭和の大修理での素屋根建設に先立つ調査では、天守台石垣の裾部から建物遺構や雨落ち溝が出土していることから、備前丸にはいくつもの建物が建ち並んでいたとみられる。



備前丸 (発掘された建物跡)



1882年の崩壊箇所

曲輪を圍繞する南側の石垣上にも多門櫓が建てられており、内部は局や対面所の広間であった。曲輪の狭隘さを補うため、石垣上の多門櫓も御殿の一部を構成する配置だったとみられる。また、天守台石垣の東側に接して建つ折廻櫓は、内部が座敷になっているので、これも御殿の一部だった可能性もある。

本多忠政のとき御殿が三の丸に築かれると、備前丸には石垣上の局と広間、そして台所だけが残った。城の中核機能は、姫山を下りて平地の三の丸に移ったのである。

■1882 (明治15) 年の火災

三の丸の御殿群は陸軍の駐屯にともない解体されたが、備前丸にはそのまま台所と多門櫓が残されていた。しかし、「二の丸を行く」の項にも書いたように、1882 (明治15) 年に備前丸にあった建物がほとんど焼失してしまった。台所を兵士が使用中の失火が原因とも言われる。

このとき焼け崩れた多門櫓が落下して、はの門東方土堀も崩壊させてしまった。現在、はの門からにの門へ向かう通路の右手に半円状にカーブする土堀が途切れているのが、1882年の崩壊箇所である。

■備前門

備前丸へ直接入ることができる唯



備前門。左手前には石棺の転用石が

一の門。本来、櫓門であったが、2階の櫓部は1882(明治15)年に焼失し、その後は1階の通路だけで、冠木の上に仮設の切妻屋根を架けるだけだった。現在の櫓部は、昭和の大修理の際に復興したものである。

門の入口両脇に大きくきれいな長方形の石が1つずつ積まれている。これは古墳に埋葬されていた石棺の身である。ほかにも城内の石垣には、古墳の石棺材が転用されて積まれている箇所がある。

■天守に登るには

現在、備前門から大天守に入ろうとすると、門を入れて天守台石垣に沿って西へ直進し、階段を使って石垣に上がり、水の五門を潜るというコースになっている。

勿論、この階段は昭和の大修理後に見学ルートとして設置されたもので、江戸時代に使用されていたというものではない。

当時は石垣上に多門櫓が載っていたので、台所の南側から多門櫓にあって櫓内の廊下を移動し、水の三門のところまで外に出て、あとは現在と同じように水の四門から天守曲輪へ入ることになっていた。現在のようにはいかなかった。(工藤)

コラム 扇の勾配

日本における城郭石垣は、接着剤を使用しない空積みを特徴とし、織田信長の安土城築城の頃から、法と呼ばれる傾斜をもつようになる。時代が下ると、法は徐々に急傾斜へと発達し、関ヶ原合戦前後からは反というカーブも出現する。

姫路城跡では、ぬの門外にあるⅡ期の備前丸西側石垣に典型的な反がみられ、現在はこれを特に「扇の勾配」と呼ぶ(53ページ下の写真参照)。ここでは、下方で65°の傾斜が上方では74°へと変化してカーブを形成する。

ただ、同じⅡ期でも天守台南面の石垣は下方でも70~72°前後あり、上方では77°とやや傾斜がきつくなるが、反は弱い。

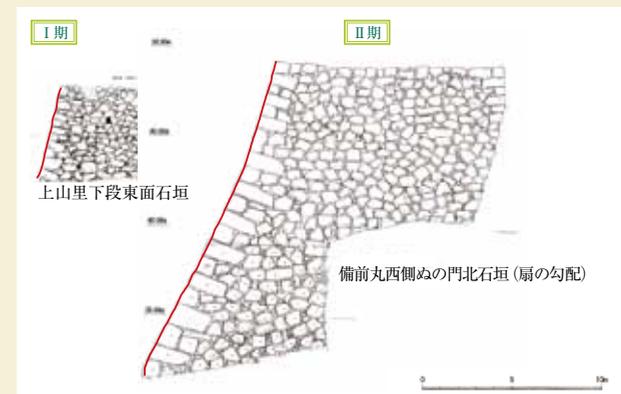
これは、天守台が強固な姫山岩盤上に築かれたのに対し、備前丸西側は姫山と鷲山間の谷部の厚い堆積のため地盤が弱く、裾広がりのカーブにされたと推定される(西田一彦「姫路城石垣の形態、地盤と保存、修復」)。

反は、豊田秀吉が晩年に築いた肥前名護屋城や朝鮮半島の倭城で、天端付近のみを急角度にしたのに始まり、関ヶ原合戦後の築城ラッシュで発達したとされる。

それ以前は、現在の天守地下で見つかった秀吉時代の天守台石垣のように反はなく、傾斜も60°と緩やかであった。また、73~75°とやや急にはなるものの、上山里下段石垣でも反は余りみられない。なお、同じくⅠ期の井郭櫓石垣も下方は60°前後あり、天端近くが82°となるのは、上山里下段石垣の一部にみられる反とともに、Ⅱ期以降に改築された可能性が指摘されている。

一方、Ⅲ期の西の丸南面石垣は、隅角部近くで下方が64°、上方72°とⅡ期に近い。ただ、部分的には下方60°、上方66°と緩やかで反が少ない箇所もある。

その他、枳形などの城門付近では、虎口空間確保のため、85~90°近くの急傾斜にしているところもある。このように、姫路城跡では、色々な要因による多様な石垣の法や反がみられる。(多田)



扇の勾配

上山里曲輪に行く

■羽柴時代の縄張りを踏襲

城郭における山里とは野趣ある庭園や殿舎を設けた一角を指す。豊臣秀吉の名護屋城や大坂城の山里曲輪



上山里曲輪



りの門



への櫓 (太鼓櫓)

がよく知られ、茶室が設けられていた。上山里曲輪は羽柴時代の縄張りかみやまどを踏襲するものである。

通称「お菊井戸」の南側からは唐津焼や瀬戸・美濃焼が出土している。遺物の年代からみると池田時代に相当するが、この曲輪でも茶が点てられることはあったようだ。その際には、この井戸で汲んだ水が使われたのであろう。

■りの門

現存する城内の建物は西の丸をのぞき、そのほとんどが池田輝政のときに築かれた歴史的建築物である。しかし、いつ建てられたか明確な年紀がわかる建物はごくわずかである。りの門はその一つで、1599（慶長4）年に築かれたことが軒天井裏の墨書から判明している。慶長4年といえは、関ヶ原合戦の前年で木下家定が城主であった。りの門まわりは輝政以前の縄張りを踏襲していることも考えられる。

■への櫓 (「太鼓櫓」)

への櫓には、出格子付きの窓がりの門前を見下ろす位置に付けられ、同時に上山里曲輪から備前丸へ向かう細長い腰曲輪への通路の関門となる。上山里曲輪東面に対する横矢ともなる逆L字形の櫓である。現在では「太鼓櫓」というが、これは近代

以降の通称で、江戸時代にはへの櫓と呼ばれていた。

■「瓶取」(お菊井戸)

上山里曲輪のほぼ中央にある井戸



「瓶取」(お菊井戸)



ぬの門前の鏡石



ぬの門。門外の石垣の反(そり)が「扇の勾配」

は深さが約20mで、現在は「お菊井戸」で知られている。酒井時代には「瓶取」と呼ばれていた井戸である。怪談「播州皿屋敷」で知られる「お菊井戸」は、この時代には城下の桐の馬場にある井戸と伝承されていた。それが明治時代になると、十二所神社境内の井戸に伝承が移っている。

「瓶取」が「お菊井戸」と呼ばれるようになったのは、明治時代末期以降で、姫路城が一般開放されて広まったとみられる。登閣した観光客に喜んでもらうため、怪談の故地を城内に移動させたのが端緒である。観光地として生き残ろうと苦心した姫路市の近代史を象徴している。

■鏡石

ぬの門の前の石垣には、大きな丸い石が2つ積み込まれている。出入口付近に積み込まれたこうした大型石材を「鏡石」といい、大坂城の「蛸石」や「肥後石」が有名である。鏡石は、出入口を通る者への示威を視覚化したもの、あるいは魔除けの効果を狙ったものと考えられているが、はっきりしたことはわかっていない。

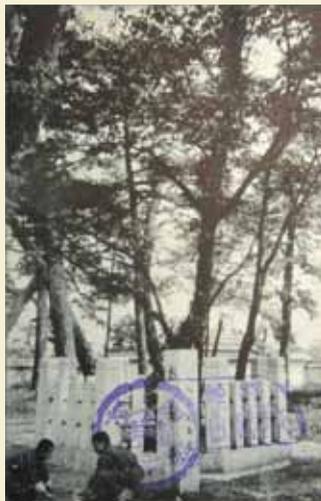
この場所では、2つの鏡石とその真ん中に縦長の石材、そして裾部に唇のような形の石が配置され、まるで人面を表現したような石積みとなっている。

コラム

お菊井戸と皿屋敷

姫路城の上山里丸に、播州皿屋敷ゆかりの「お菊井戸」として知られる井戸がある。江戸時代は、俗に「瓶取」と呼ばれていた。傍らに立つ「お菊井」の石碑に刻まれた年紀は大正元年（1912）、明治末年の大改修を終えた姫路城と整備された姫山公園が一般公開された年だ。当時この井戸から桜が生えていて怪しい雰囲気があったと、『姫路城史』（橋本政次著）は記している。歌舞伎や読み物で馴染んだ播州皿屋敷の舞台、姫路城。そこに足を踏み入れた登閣客たちにとって、見物したいものの一つが、お菊が夜な夜な現れ、皿の数を数えた井戸だったことは想像に難くない。瓶取井戸は「お菊井戸」と命名され、今も人気の観光スポットとなっている。

酒井氏時代の「六臣譚筆」は外京口門近くの小幡家にお菊の墓とされる石地蔵があることなどを記しているが、お菊井戸があるのは「霧（桐）の馬場」としている。江戸中期に怪談・奇談を聞き集めた『西播怪談実記』（春名忠成著）の「姫路皿屋敷の事」は、皿数えの音が響く皿屋敷は今も桐の馬場にあると記す。桐の馬場は中曲輪の北東隅にある馬場である。池田輝政の時代は軽輩の屋敷が並んでいたが、本多忠政が更地とし馬場を造った。皿屋敷伝承は、古い在地秩序を壊して建設される城下町の怪談、皿は更地の「更」といわれる。姫路の人々にとって、城の鬼門に位置する桐の馬場は、主家を滅ぼすお菊が現れる場所にふさわしかったのだろう。お菊を斬殺する青山鉄山の小屋敷は五軒邸とされ、やはり、桐の馬場に近い。



古絵葉書にみるお菊井戸

なお、お菊に横恋慕し皿を隠す鉄山の家来、町坪弾四郎の屋敷は車門近くにあり、姫路名物だった車門そばの梅雨の松にお菊は縛られたとされた。

『日本の皿屋敷伝説』（伊藤篤著）には、全国で約50近い皿屋敷が報告されている。その中でも播州と江戸の番町の皿屋敷は歌舞伎となり人気を博したが、上演は播州皿屋敷の方が早い。天正5（1577）年の年紀を持つ『竹叟夜話』（永良竹叟著）には、皿屋敷伝承の基本的モチーフを持つ、青山を舞台とする話がある。姫路の皿屋敷伝承を読み解く手がかりは、お菊井戸の底に潜んでいるのかもしれない。（埴岡）

■ぬの門

三国堀のある曲輪から上山里曲輪への関門である。3階建ての櫓門で、櫓部が2階になっている珍しい城門である。櫓部は東側だけが石垣上に載り、そこから櫓へ出入りするようになっている。建物内部には階段がなく上下階の行き来ができない。

門部はすべて鉄板張りの重厚な造りになっている。門部の上には「隠し石落し」が付き、2階の出格子窓も石落しになっている。

■りの渡櫓・チの櫓

ぬの門の西に接する櫓がりの二



りの渡櫓旧状



狭間のない上山里曲輪の土堀

渡櫓で、この南にりの一渡櫓が伸び、チの櫓となる。いずれも2階建ての建物で、ぬの門の西に接する櫓の1階は石垣に三方を囲まれる穴蔵となっている。

城内側は庇が付き、物資の搬入ができる引戸がつく。城内側ではほかに開口部はない。酒井時代には、火薬の原料になる苧殻が貯蔵されていた時期がある。現況ではチの櫓も同様だが、狭間はある時期に埋められている。

りの二渡櫓の南室は、城内側が開放されて、現在では天守大棟の鯨瓦を展示している。このように開放されたのは明治の大修理後のことで、江戸時代には庇がチの櫓まで続くことはなく、廊下とみられる部屋が、現在石棺の置いてある引戸の前まで続いていた。

■狭間の無い土堀

「お菊井戸」から南を見渡すと、南から東にかけて狭間の切られていない土堀が続いている。この場所には、かつてトの櫓とそれに続く多門櫓が建っていた。それらの櫓は近代になってから取り壊されて、その跡を土堀にしたのである。本来、土堀のなかった場所に建てたものなので、狭間を切らなかったのである。（工藤）

コラム

縄張

姫路城は姫山と鷲山と呼ばれる小丘陵に築かれた平山城。西麓には市川から分かれた船場川が南流する。

周囲は内堀・中堀・外堀と三重に堀をめぐらす。内堀内が狭義の城内で、内曲輪と呼ばれる。天守や西の丸のある丘陵部分と山麓の三の丸で構成される。内曲輪外の北・東・南側には中曲輪、その外側に外曲輪があり、それぞれ中堀と外堀が囲む。中曲輪内は中・上級家臣の屋敷地区で、南東の一角に播磨国総社とその社家が集められていた。外曲輪は町屋と寺町、下級武士の屋敷があり、全体を外堀で囲む総構の城下町を形成していた。

縄張の基本は、内曲輪を中曲輪と外曲輪が取り囲む輪郭式であるが、西側のみは船場川が外郭となったため、中・外曲輪を設けることができず一部で梯郭式となっている。また、堀の続き方かららせん式（渦郭式）に分類されることもある。

外堀には山陽道（西国街道）から続く外京口門と備前門。南側の飾万門（飾磨津門）と北条門。北西に竹門（竹之門）が開く。生野街道（旧野里街道）東側の「堀留」で外堀は止まり、平時において外曲輪の北側には、堀などの区画は設けられていなかった。

中堀には内京口門や中ノ門（中門）など11カ所の出入口があり、車門など西側の3カ所は船場川を渡って直接城外へ通じていた。

17世紀初頭の池田時代に成立した「慶長播磨国絵図」には、すでに中堀や外堀の表記がみられ、その頃には縄張の基本が成立していたとみられる。

それ以前、豊臣時代の様子は明確でないが、1580（天正8）年には車門外への籠野町へ秀吉から市日を示す制札が出されており、北側の野里でも同じ頃に町場が存在していたので、家臣屋敷など城に付属する内町と、その周囲に散在する独自性のある市町などで構成されていたと推定される。

明石城や赤穂城に町屋を囲む外堀はなく、播磨において総構を有する城下町は姫路のみ。総構は彦根城など関ヶ原合戦後に築城や改築された城に多く、その背景に豊臣大坂城包囲の軍事的緊張が推定されている。ただ、同時期の城でも篠山城に総構はなく、名古屋城では未完に終わっている。姫路城の場合、軍事的な理由だけでなく周囲の外町を城下内に一元化する政策的な役割から設定された可能性も考えておきたい。

内曲輪では、豊臣時代と関ヶ原合戦以後の縄張が混在する。たとえば、南側の内堀は両側が斜めに突き出し、塁線全体で大手の喰違い虎口を形成する。これは、豊臣期大坂城本丸上段の虎口形態と共通する。堀の方位は、発掘調

査で確認された豊臣時代の城下区画とも一致するので、その原形が豊臣時代に遡る可能性は高い。ただ、それを構成する石垣はⅡ期のものであり、池田時代になっても古い縄張を踏襲したことが窺える。

本多時代以降は、大手内側に外門と内門で構成する枡形が設置されるが、このような典型的な枡形を内曲輪ではほとんどみることができない。この点も、定型的な枡形が成立する以前の古い縄張と評価できる。なお、中堀の虎口では枡形が多く使用されるが、これは本多時代以降に増築された可能性が高い（姫路市立城郭研究室『姫路城絵図集』）。

さらに、大手門を入ると三の丸中央を直線の通路が続く。このような大手道の設定は織田信長の安土城にあり、その前身の小牧山城に存在した可能性も指摘されている。1580（天正8）年、羽柴秀吉は姫路での信長の御座所築造を指示されているので、この通路も原形は織豊期まで遡る可能性があろう。

菱の門以内の丘陵部は、小規模な曲輪に分かれ迷路のようである。それが名城としての姫路城の特徴とされるが、その箇所は、Ⅰ期の石垣を残すところが多い。Ⅱ期以降の石垣で構成される備前丸や西の丸は地形の影響を残しながらも、高石垣で曲輪面積を広く確保し、通路もシンプルに設定されている。

内曲輪は、関ヶ原合戦以降の進化した縄張ではなく、つぎはぎに改修されながらも縄張が定型化する前の織豊期の形態を色濃く残しているのである。

（多田）



姫路城下町復原縄張図（『姫路市史』第14巻（別編 姫路城）より）

搦手を行く

■城の東エリア

城の正面が大手なら、その反対、裏側に相当するのが搦手である。

姫路城では南に大手が位置し、搦手は東側になる。羽柴秀吉が姫路城を築いた当時は、大手は東だったという話があるものの、真偽のほどは定かではない。

現在、美術館の南にあった喜齋門が、搦手の入口（搦手口）にあたる。大手門を入ると三の丸の御殿群



搦手の入口



米蔵のあった辺り



急坂で狭い搦手道

が建ち並ぶのとは対照的に、喜齋門の内側には、内船場蔵と下三方蔵が建てられていた。内船場蔵は井戸曲輪の高石垣の直下に位置し、年貢を収納する米蔵であった。城下近郊の村々から米が納められた。下三方蔵は、藩士に給付される扶持米が収納されていた。このように搦手口には、藩の実務を支える米の管理や出納がおこなわれる施設があった。

■との三、四門

喜齋門を入ると土堀に囲まれた広場があった。武者溜りと評価できるが、蔵への物資を出し入れするにも必要な空間であった。その広場から姫山に取り付く道が搦手道である。姫山の東裾部にまずとの四門があり、そこを入るとほぼ北向きに大きな凹みが残っている。古墳の石室の痕跡にも見えるが、これは穴蔵跡で、火薬が収蔵されていた。現在は樹木に覆われてよくわからないが、火薬庫の石積みの側壁が一部残存している。

との四門からは姫山の急斜面を登るため、道筋は曲がりくねり、「七曲り」とも通称される。木立の中を通る曲がりくねった道の景観は、戦国期の山城を彷彿させる。

搦手道の中程にかつてとの三門があったが、近代になって市内飾東町の八王子神社に移築された。立派な高麗門であったが、老朽化のため

2011（平成23）年頃に解体撤去された。

との三門あたりから、山上に向かって高石垣が、前方および左方に迫ってくる。搦手道はその石垣の下を通るように折れ曲がる。横矢（側面からの射撃）を意識して、石垣上に帯の櫓と井戸櫓（井郭櫓）が築かれていることがわかる。

■との二門

さらに、との二門に到達すると、背後に井戸櫓、側面はとの櫓と土堀で囲まれ、行き場を失った感覚になる。ここが搦手口を押さえる最後の関門であることを実感する。

との二門の手前に北向きの石段があり、その上が平場となっている。姫山の頂部から東に伸びる尾根を削



長壁神社のあったあたり



との一門

平して築かれている。ここに姫山の地主神である長壁神社が祀られていた。現在は「長壁神社遺跡」と彫られた石碑だけが残っているが、かつては石段を登ったところに朱塗りの鳥居があり、拝殿と本殿もあった。池田輝政が八天塔を建立したのもこの場所であった。この尾根を東に下った裾部にあった門が八天塔門で、のちに八頭門と呼ばれるようになった。

長壁神社には城主も参拝するが、ふつうは城主本人の代わりに家臣が参詣していた。

■との一門

さて、との二門をすぎると、櫓門であるとの一門となる。ここは、との二門ととの一門で枡形虎口が構成されている。姫路城内で枡形虎口の外門と内門が現存する唯一の場所である。

との一門はほかの建物と異なり、白漆喰で塗込められず素木のままである。昭和の大修理前までは漆喰塗込めであったが、解体の結果、本来は塗込めでなかったことが判明し、もとの姿に戻したものである。門扉は半透しで、窓は突上戸、饅頭金物（半球状の金具）には樽口（金具中央から出ている棒）がないなど、ほかの櫓門と比べると古い形式の部分がある。置塩城から移築されたものという伝承をもつ城門である。（工藤）

* 2017年1月現在、工事のため、喜齋門からは、との一門までしか行けません。

コラム

殿様の見回りコース

菱の門から内側は「城山」とも言われ、「山」でもあった。城主が江戸から帰国すると、その「山」を巡見するのである。城主だった酒井忠以による『玄武日記』にはその巡見ルートが記されている。

城主は東屋敷で寝起きし、朝、本城へお出になる。本城からは乗物で出かけ、菱の門で下乗となる。そこで草履に履き替えて、留守居が先立ちとなって徒歩での巡見となる。菱の門からそのまま直進して、いの門からろの門、はの門を通り、乾曲輪からほの門を潜ると天守曲輪下の北腰曲輪に出る。途中、城代などが道沿いに並ぶこともあった。ここまでのルートを「上道」といった。

北腰曲輪からは水の一門を通過して、二の渡櫓一階の水の五門を通り、天守曲輪内へ進み、西小天守地階の水の六門から天守入口に至る。天守入口は石段になっていて、この下で上草履に履き替え、大天守の建物の中に入ることになる。天守最上階では、室内に毛氈が敷かれ、御褥と刀掛が出された。こうした仕度は事前に御小納戸方から借り出して、準備していたのであろう。

最上階からは階下に向かう。小天守も巡見したが、そのルートはわかっていないが、天守階段の位置からすると、1階から二の渡櫓、西小天守へと廻り、イの渡櫓から再度天守1階に入って、上草履に履き替えた入口へ戻るのが順当である。

水の四門を出た城主は備前丸へ向かう。備前丸の石垣上には対面所の広間と局で構成される多門櫓が連なっていた。対面所の東に階段があり、そこから一旦備前丸の曲輪に出て台所の横を通過して備前門を出て、井戸曲輪、上山里を経てぬの門をくぐった。ここまでの「下道」といった。そして西の丸へ向かい、菱の門から帰館というのが「城山」の巡見ルートであった。「城山」巡見だけの所要時間は不明だが、城主が東屋敷を出て帰館するまで、約4時間の行程であった。
(工藤)

コラム

姫山樹林

天守・西の丸の北側の樹林は、常緑樹がうっそうと茂った外観から姫山原始林と呼ばれていたが、学術的には全く人の手が加えられていない極相状態の原始林とはいえないので、現在は姫山樹林と呼んでいる。

天守・櫓などの石垣下から堀までの急斜面に見られるこの林は、姫路城近辺の増位山や広嶺山、書写山などの社寺に見られる人の影響の少ない一般的な林とは異なり、なぜかシイが非常に少ない特異な林である。

林内に見られる樹種は、タラヨウ、カクレミノが多く、アラカシ、ヤブニッケイ、モチノキ、ナナメノキ、カゴノキ、ヤブツバキなどの常緑樹が見られ、ムクノキやエノキなどの落葉樹の大木や、秋に紅葉するカキ、ハゼノキなどが見られる。林内の若木の生育状態を考えると、このまま放置すれば植生は徐々に遷移すると思われる。また、近年シュロが増えてその影響が心配されている。

林の最上部の石垣下に作業用通路がある。人が通るので林外からの影響を受けやすい部分であり、日当たりが比較的よいこともあって、外来植物をはじめいろいろな植物が新たに侵入しやすい場所である。

林を外から見ると、木々を覆うつる植物が多いことに気づく。クズやフジの仲間などの大型木本性のつる植物や、カラスウリ、ヤブガラシなど草本性のつる植物、テイカカズラ、キツタ、イタビカズラのような付着性のつる植物も多い。これらつる植物が、他の植物の上に枝葉を広げると光不足になっ

た植物が枯れてしまうこともある。さらに、石垣、建物の方へつるを伸ばせば、白壁、建物を破損する恐れがあるので定期的に処理されている。

都会の中にあるこの林は、多くの野鳥や小動物の休息場所となり、繁殖場所となっている。

2010年の調査で確認された林内の植物は、木本類が54種、草本類が102種類である。
(家永)



姫山樹林